

1-1 都市空間デザインコンセプト

新幹線飯山駅周辺地区に整備される都市空間は、本地区に関わりを持つ多様な主体が永続的に取り組んでいくまちづくりの姿に他ならない。1-1では、地域住民が良好かつ創造的なまちづくりに向けて一体となって取り組んでいく上で基本となる、将来の都市空間イメージを前向きかつ共通に認識できるようなデザインコンセプトを提示する。

1) デザインコンセプト（キーワード）の役割

新幹線飯山駅周辺地区など区画整理を伴うまちづくりでは、多様な主体の利害が対立する。そして、その利害の効率的な調整を中心にまちづくりを進めることは可能である。しかし、人間には向上心があって、どうせつくるなら良いまちをとという意味がしばしばここに絡んでくる。利害調整のみに終始したまちが、味気なくて、長期にわたって愛着を持ち得なかったり、個々人の欲望を剥き出しになったようなまちが、その土地がもともと持っている魅力からかけ離れ、むしろその魅力さえ蝕むことになって、来訪者に愛想尽かしされるようなことになったら、とりかえしがつかない。

しかし、かりに、互いの利害を乗り越えて良いまちをつくろうとする意思をもち得たとしても、多くの人々がかかわり、かつ長期にわたるプロジェクトでは、はじめの意思を保持することは簡単ではない。様々な価値観と時流の変化に吞まれて、ともすれば場当たりの対応の積み重ねに終始する恐れがある。

そこで、意思をコンセプトというかたちで集約して表現し、互いに共有し、個別的な取り組みもコンセプトに照らして妥当性を検討しながらプロジェクトをすすめていくという方法が、しばしば採られる。個々別々の価値観、目の前の利害を乗り越える努力はかなりの重荷となるので、その努力の意義を見失わないよう、的確なキーワードによってコンセプトを掲げておくのである。

地元の人か否かを問わず、誰でもコンセプトを提案できるが、そのコンセプトを通しておおまかなまちの将来像を前向きにイメージできることが望ましい。その意味では、これまでの飯山にありつづけて、皆が今後も大事にしていきたいという何ものかを含んでいて、しかも将来の飯山の創造的な展開を予見するものであることが重要だろう。そのキーワードによってかけがえのない土地のありようを再評価し、自らとその子孫が、その土地に住まいすることにあらためて誇りをもちうるような何かであり、将来に向かってそれを錬磨し、発展させることで、来訪者すらその土地に惚れ込むような何かである。

したがって、コンセプトを表現するキーワードは、抽象的すぎて実感がわからないのも困るし、即物的すぎてまちづくりを硬直化するものであっても困る。単なる言葉遊び、語呂合わせのようになっても空虚であり、あれもこれもといろんな思いを羅列しすぎると、核心がぼやけてははじめの意思を見失いかねない。

2) 飯山に捧げられてきた様々なキーワードをめぐって

飯山という土地には、市や市民団体の協議によって、既に様々なキーワードが捧げられて

きた。これらを振り返ることで、飯山駅周辺という枠を超え、飯山市の将来に向けられた人々の意思に接近することができるだろう。ここでは次頁以降、その主なものを吟味してみる。

①全市公園化構想

まず、全市公園化構想(平成9年3月)は、故渡辺貴介氏(前、東京工業大学大学院教授)の提唱によって策定されたものと聞く。そのなかに「人と自然が響き合うまち」とある。「人と自然が響き合う」という表現には、相連なるふたつの決意が読みとれる。ひとつは、拝金主義とも思えるような開発至上主義が、わが国の伝統的な集落や、田園、林野をまたたくまに改造し、われわれの精神文化の依るべき土壌の喪失に無頓着であったと再確認すること。次いで、手つかずの自然、野生の自然を単純に賛美する人間不在の幻想を捨て、自然のありようが人々に影響を及ぼすとともに、人々が自然に働きかけるという相互的な営みから文化的なまちを将来に向けて再構築すること、である。ちなみに、ここでいう文化的なまちとは、いわゆる芸術・文化関連施設が立ち並ぶまちを必ずしも意味しない。日々の生活の中で、自然とのかかわりを宝とする感受性と自然とのかかわりから創造性を発揮する人々が住まうまちという意味である。

②飯山市景観形成基本計画

全市公園化構想を受けた飯山市景観形成基本計画では、飯山の風景について5つの将来イメージが掲げられている。すなわち「五感で四季を感じる風景」、「あたりまえな風景」、「人と自然が織り成す風景」、「思わず足を止めたくなる風景」、「飯山にこらっしゃい」である。ここで、いちいちの解釈を試みることは控えるが、こうしたキーワード群の指し示すところは、飯山市民が、飯山の風土についての感受性を鍛え上げ、その感受性によって生活のありようや土地の風景を磨き直し、その上で来訪者をもてなそうではないか、という姿勢にほかならない。これはすなわち、飯山の土地柄の良さに対する市民の自覚と誇りの反映であり、したがって、駅周辺のまちづくりが、こうした誇りを傷つけるものであってはならないことが、すでに前提されているということになる。

③新幹線まちづくり市民会議報告書

新幹線まちづくり市民会議報告書では「自然と文化・人情にあふれたまちづくり」が掲げられている。この報告書は、まさに駅周辺のまちづくりに向けた提言をまとめたものであるだけに、かなり具体的な事項に論及しているけれども、この中で「人情にあふれた」というキーワードが明記されたことは、前二者①②に対して特徴的である。近・現代社会において人間が陥りがちな孤独・孤立という問題を、飯山は看過しないという宣言だとみることができよう。したがって、この報告書では、福祉という概念も、単なる施設整備主義を越えたところに位置づけられている。人は土地柄の良さのみならず、出逢う人の人柄の良さ、思いやりによって「和む」のであり、まちなみの良さということも、そこに住まう人の思いやりによって裏付けられるのだという趣旨がこの報告書で表明されていると言えるだろう。

④ウェルカムプラン(北陸新幹線飯山駅周辺地区計画)策定調査報告書

ウェルカムプランのキーワードは「不易」、「悠久」である。ここには、時流とともに次々と嗜好を変化させる観光客にいたずらに追従することが、結局はその土地がもつ本

来の魅力を崩壊させ、ついには誰にも見向きもされなくなる事態に向かうとの危機意識が反映している。

一方、物見遊山やブームに載った物量的、刹那的満足を希求する、ある意味でその土地に対して無責任とも言える態度をとってきた観光客のあり方も変化してきている。本物を選びとる落ち着きをかれらが少しずつ見せ始めているのである。観光客を吸引できるとなればその土地に無いものでも持ち込めばよいといった類の観光開発や、ある時期にたまたま知名度を獲得するとそれに便乗して結局のところその土地の良さを食べ物にするような観光産業の姿勢は、いずれ終焉に向かわざるを得ないだろう。

少なくとも、飯山をはじめとする北信濃地域はそのことを確認したという趣旨が、ウェルカムプランの「不易」と「悠久」に込められている。これは、その土地固有の環境に磨きをかけ、土地に住む人々と来訪者とがともにその良さを味わうような、そして、その土地柄を経験する喜びを互いに分かち合えるような地域づくりの姿勢へ、観光行政を転換させよという呼びかけである。ここに、地元の人々のくらしぶりの真の豊かさと、来訪者の満足とがはじめて一致をみる可能性が予見されているのである。

⑤土田耕平（アララギ派歌人）

短歌や俳句のことばづかいをキーワードとして扱うのは多少問題があるかも知れないが、土地柄、人柄に対する作者の思いがどのようなものであるかを知る手がかりとして重要である。とりわけ、土田耕平の次の短歌は、全市公園化構想にも、新幹線まちづくり市民会議報告書にも引用されているから、それぞれが掲げたキーワードとこの短歌とは相通じるものがあるだろう。すなわち、

きはだちて ふかき峯とてあらなくに この地のすがたわれは親しむ

土田は、病氣療養のために飯山の地に滞在したという。高山峻岳が覇を競い、深い谷を随所に抱える信州の他の土地に比べて、飯山の山河はじつに穏やかなたたずまいを見せている。この歌は、このような土地に心身を休めて癒されたことを踏まえた、飯山の山河への土田の挨拶の歌なのである。「この地のながめ」ではなく「この地のすがた」と言ったところに、飯山の土地柄への土田の敬意と感謝の気持が表現されているとみるべきだろう。「ながめ」は見る側本位、「すがた」は相手本位だからである。飯山は、病んだ「わたし」を受け止めてくれた土地として、かくて人格化されているのである。①において述べた「日々の生活の中で、自然とのかかわりを宝とする感受性と自然とのかかわりから創造性を発揮する」とは、まさに土田のこうした歌作に象徴される。

■図表 1.1 飯山に捧げられてきた様々なキーワード

No	構想・計画名	キ ー ワ ー ド
①	全市公園化計画	「人と自然が響き合うまち」
②	景観形成基本計画	「五感で四季を感じる風景」「あたりまえな風景」「人と自然が織り成す風景」「思わず足を止めたくなる風景」「飯山にこらっしゃい」
③	新幹線まちづくり市民会議報告書	「自然と文化・人情にあふれたまちづくり」
④	信州菜の花地域ウェルカムプラン	「不易」と「悠久」 「風土博物館：原風景ミュージアム」
⑤	土田耕平（アララギ派歌人）	きはだちて ふかき峯とてあらなくに この地のすがたわれは親しむ

3) 都市空間デザインコンセプト：風雅のまち

これらのキーワードを踏まえつつ、まずは本調査ワーキングコア（P. 序-10 参照）の域外からの専門家（東京工業大学大学院社会工学専攻の齋藤研究室ならびに真野研究室）が現地を訪れたときの印象を紹介し、それに基づいて都市空間デザインコンセプトを提示する。

①山河と向き合うまち

現地を訪れたとき、まずは飯山の山河の眺め惹かれた。悠々たる千曲川の流れに沿って、東に高社山、高標山（たかっぴよやま）、城蔵山、城山、毛無山が連なり、西に鍋倉山、仏ヶ峰、黒岩山、斑尾山が連なっている。飯山市街西郊には南北に長く、長峰丘陵が続いている。

飯山の山河の美しさに魅了されるのは比較的居住経験の比較的浅い人々であり、土地の人々の人柄のよさを感じ入っているのは、長くこの土地に住むようになった人々だと指摘した山口満氏の論文（「長野県飯山市を事例とした寺町のイメージに関する研究」（建築学会計画系論文集 551, 2002））は、まさにそのとおりだった。

そのような山河の中で、まず最初に目を引いたのは南東に聳える高社山だった。古くは修験道の聖地であつたらしく、山中の岩場に残る天狗岩・大岩・夫婦岩・薬師岩・大黒岩・屏風岩などの名称がその一端を覗かせる。二瘤状の肩を西側にもつ高社山の力強い山容はこの地をはじめて訪れる人々に鮮やかな印象を与えるだけでなく、地元の人々の心の支えともなってきたようである。旧制飯山高等女学校校歌（高野辰之作詞）に

とはに揺るがぬ啓示をば 常に高社の山に見て 少女我等は学ぶなり

とある。正受庵の庭もこの山を借景にしている。

現地入りして時間を経過するにつれ、はじめは連綿として区切りがないように見えた東の山並みから、いくつかの山が識別され記憶されるようになった。城蔵山の瘤状の山頂、高標山の尖峰、毛無山の悠然たる構え。そのきっかけは、飯山市街の路上での、東の山並みが家並みに部分部分に切り取られて見える景観だった。さくら通りを東進すると千曲川の土手の手前で城蔵山と高標山の二峰が並んで見える。在来線の飯山駅前から家並みに切り取られて見えるのは城蔵山の肩である。南町の東西の道路から見えるのは、城蔵山と高標山の中ほど、カヤノ平あたりのピークと思われる。

高社山はそれ自体でひとつのまとまりをはっきり見せる山であるから、この山を眺めるとき、山に向き合う気分が伴う。志を高くもてというメッセージをいつも高社山に見出すと詠った飯山高女の校歌も、この山のそんな山柄から生まれたのだろう。

一方、連綿たる東の山並みは伸びやかな眺めを見せるけれども、ややとらえどころがない。その山々のひとつひとつに向き合うという感じになりにくいのである。しかし、東の山並みの中の特定の山に向き合うきっかけはあって、それが家並みの間から一部が顔を出すように見えるときなのである。その状況は前に述べた。

飯山市街の北方に関田山脈を背負う仏ヶ峰が、紅葉に燃える長峰丘陵の向こうに遠く

見えるのも印象的だった。さくら通りから西進するときの長峰丘陵の眺めも、広げた屏風をみるようだった。城山の北斜面を右手に見ながら福島谷筋を阿弥陀堂のあたりまで登り詰め、山田を手前にして西方を振り返ると、遠く妙高山や斑尾山が望まれた。その足下に千曲川が銀の帯のごとくうねりを見せていたのも忘れがたい。

現地を訪れたわれわれの目に、飯山は、まさに山河と向き合うまちとして映ったのである。



②まちのたたずまいの良さ

飯山市街を訪れて、最初に案内されたのが仏壇通りで、花フェスタ開催期間の最終日だった。いわゆるフラワーフェスタなら珍しくもない。単にたくさんの花を賑々しく飾っているだけなのだろうと思ったが、ふと、それぞれの花にアレンジした人の名前が付けられているのに気づいて、浅はかな考えを改めなければならなかった。車両通行止めにした路上に、あるいは寄せ植えられ、あるいは面をなすように広げられていたのは、お仕着せの花ではなかった。参加した市民が、互いにアレンジの腕を競い合いながら、ともに花の美しさを愛でる場として花フェスタがあったのである。ここ数年の間に技術的努力と創造的工夫を重ねることを通じて、それまで以上に人々の間に互いに声を掛け合ったり笑い合う和やかさが生まれたとも聞いた。あるものごとでこだわりをもつと、他人のこだわりもまたよく見えてきて、お互いを認め合う関係が育つということだろう。夕刻、花フェスタが閉幕した。路上に広げられた花々が片づけられてひっそりした通りの店



花フェスタ(仏壇通り)

先に、それでも名残の花がところどころに飾ってあるのが、昼の華やかさとはまた別の、しみじみとしたものがあって印象的だった。

寺院には、参道を包むように前庭がある。それが、寺参りをする人々に対する住職の挨拶でもあり、寺参りの人々のところに静けさをもたらす装置でもある。はじめに訪れた時節が秋で、寺院によっては前庭一面に銀杏の葉が散り敷いたところもあった。ある寺院では、山門前の石段に左右から萩がしなだれかかって見事だった。萩の石段を抜けた山門の奥は、静謐ともいふべき苔の庭だった。カメラを構えるわれわれ一同のあわただしい動きが落ち着くのを、その庭の端でじっと待ってから一礼して、しずかに庫裏に向かった女性がいた。それにひきかえ、われわれがひどく野蛮な人間に思えて、じつに情けなかったのである。

思えば、花フェスタの見学の折にお逢いした歌人の某氏（痛ましいことに今は故人となられた）は、新来のわれわれのために、じつにこやかにしかも慎ましやかに、花フェスタの運営について説明してくださった。われわれが車で立ち去るときも、いつまでも見送って下さったのである。

住宅地を歩くと、家々の周囲に小さな庭があって、樹木や草花が植えてあるのだった。家々は、通りから一步引いた格好で立ち並んでいる。宅地に塀はほとんど見られず、道行く人の目に、庭先の草花や花木が映る。この庭先は、実は冬季の堆雪帯なのであった。堆雪帯を、冬以外は草木を育てる楽しみのために使っているということになる。花を丹誠込めて咲かせる行為は、おのが喜びであろうけれども、同時に、道行く人々への挨拶のようでもある。堆雪帯を無味乾燥に放ってはおかないというところに、このまちの人々の精神文化の優雅さをみる思いだった。

冬に飯山を訪れたときには、家々の庭先は厚い雪の下だった。屋根の上にも分厚く雪が積もり、ところどころで雪下ろしが行われ、その雪は庭先に滑り落ちた。寺院の庭もおなじように厚い雪に覆われた。人ひとりがようやく通れるような雪の隙間が掘られ、そこから頭だけ雪上に出して行き来する経験は、印象に残った。

古い雁木の柱は、上に積もった雪の厚みに比べていかにも華奢だと思えるような細いものだった。雁木のありがたさは、このまちの膨大な積雪量を経験しないことにはわからない。そして、雪のまちを風景として眺める余裕は、われわれが雁木の中に身を置いたときにこそ生まれたと言ってもよい。また、雁木は、店舗に近く人々を引き寄せる役割を果たしていて、そのことが、店構えや商品の陳列にひと工夫加える店主の意欲に繋がっているのではなかろうかと思える場面もあった。

雁木も含めて、雪の中に暮らす工夫が通りから一步下がった家々の玄関先・庭先に彩りや特徴を与えているというのが、飯山のまちの印象である。和辻哲郎風に言えば、飯山の人々に除雪の重荷をもたらす冬は、春から秋には草花を植えて愛でる余地を庭先にもたらすところの冬であった。悪天候でも外出の便宜をはかり、あわせてそこから雪のまちを眺める余裕さえ生み出す雁木をつくらしめたところの冬でもあった。家屋を通りに迫るように建て、その外壁と道路敷との僅かな間隙にブロック塀を差し入れることすら多い東京の住宅を見るにつけ、飯山の冬はこのまちの風景に豊かさをもたらしているとさえ言いたくなるのである。

③風雅のまち

こうして、この土地を訪れて皆が確認したことは、美しい山河を舞台として、自然と向き合う、人と向き合う、その向き合い方が慎ましやかで優雅だということだった。それを一言で表現するなら、風雅ということになるだろうか。それは、滞在の中で垣間見えたこのまちの下地についての印象であり、このまちで出逢った人々のとりわけ慎ましやかな振るまいを典型とする印象である。

このまちの隅々までがそうということではない。目を転ずれば、派手で大きな看板を掲げた店舗もあり、人目を驚かす作り物を打ち立てた建物もある。通りぎりぎりまで建て詰めて、軒を滑り落ちる雪が通行人に当たったらどうするのだろうと不安を覚えるような店舗もあった。しかし、この種の、現代日本の都市の粗暴であることにおいてごくありふれた景観が、飯山では決して優勢を占めるわけではないというところに、ひとつの可能性をみる思いがした。

こうした自然や人との向き合い方が将来にわたってそうあって欲しいという思いを込めて、飯山駅周辺地区の都市空間デザインの基本コンセプトを代表するキーワードとして「風雅のまち」を提示する。飯山駅周辺は、そんなまちの玄関なのだという認識をもって方向付けられることが、大事なことのように考えられる。

なおキーワードには、「飯山駅が飯山というまちの駅ではなく、北信州の駅（玄関）であるという認識」を共有し、あわせて「北信州の玄関口となるべき駅前広場が、交通処理機能至上主義の、ありがちで無味乾燥なものであってはならないという思い」を共有するねらいも込められている（デザイン会議地元住民代表幹事 大高修氏など）。キーワード「風雅のまち」は、それに応え得るものだと信じる。

(1) デザインコンセプトの役割についての共通認識

「良いまちをつくりたい」という意思をコンセプトという形で集約して表現し、互いに共有し、個別的な取り組みもコンセプトに照らして妥当性を検討しながらプロジェクトを進める。

(2) 飯山に掲げられた様々なキーワードの解釈

上位・関連計画、あるいはかつて歌人が詠んだ飯山の詩等に掲げられたキーワードを解釈

(3) コンセプトの提案：風雅のまち

- ①山河と向き合うまち
- ②まちのたたずまいの良さ（花、寺町、冬季の堆雪帯、雁木など）

美しい山河を舞台として、自然と向き合う、その向き合い方が
慎ましやかで優雅である。

風 雅 の ま ち

(4) デザインコンセプトに関する市民の理解

- ①「風雅のまち」というキーワードには共感を覚えること
- ②深い精神性を大事にしようという認識を共有
- ③人々の暮らしが大事だ（暮らしぶりが魅力だ）という認識を共有
- ④飯山駅が北信州の玄関口であるという認識を共有
- ⑤その駅前広場が交通処理機能至上主義の無味乾燥なものであってはならないという思いを共有

1-2 都市空間デザインの留意点・課題

ここでは、2章以降具体的に検討すべき新幹線飯山駅周辺地区の都市空間デザインの留意点や課題を概説する。

1) ゾーニング・機能配置などにおける留意点・課題

(1) 基本的な留意点

新幹線飯山駅周辺地区の区画整理の範囲は、現在、ほとんどが第一種住居地域（建蔽率 60%、容積率 200%）および準工業地域（同上）に指定されている。このうち、準工業地域に指定されているのは、在来線飯山駅を中心とした鉄道敷に沿う範囲と、駅舎南側、じょんのび蔵の周辺一帯である。とりわけ第一種住居地域に該当するこの地の多くは、これまで戸建住宅によって占められてきた。その同じ地が飯山市、あるいはもっと広く北信州地域の表玄関としての役割を与えられるにあたって、用途地域指定の変更（商業地域への）を要するか、否かが論点となる。

これに関連して、在来線飯山駅周辺から仲町付近に及ぶ一定範囲はながらく商業地域（建蔽率 80%、容積率 400%）に指定されてきたことと、その都市現況をどのように読むかが鍵となる。実際のところ、この商業地域内は 2-3 階建て建築物が多く、5 階建て以上はない。

また、この地がひろく戸建住宅用途にあてられてきたということは、区画整理後も小規模敷地が集合した状態におかれることを意味している。いくつかの小規模敷地の地権者が店舗経営を開始するにしても、現状の第一種住居地域で対応可能であることも念頭に置く必要がある（第 2 章 2-2 参照）。

(2) 都市景観という観点からの留意点

経済的妥当性からみた検討とは別に、かりに、この地の一定範囲があらたに商業地域に指定され、地権者がその権利を最大限に発揮すべく建築行為を展開した場合、この地がどのように変貌するかについて事前に予測しておくことは重要である。

全市公園化構想、飯山市景観形成基本計画、信州菜の花地域ウェルカムプラン（北陸新幹線飯山駅周辺地域振興計画）策定調査報告書、新幹線まちづくり市民会議報告書のいずれにおいても、市民をはじめとするかなりの人々が、この地をありきたりなものにはしたくないという思いを綴っている。ここでいうありきたりなものとは、地域性という文言こそキーワードとして使用しながらも、結局は自由な経済活動を支持するという大義名分のもとにがさつで陳腐化した駅周辺空間に帰結した数多くの事例である。つまり、あまり上等とは言えないオブジェを据えた自動車優先の交通広場と駐車場とが駅前に陣取って、その周囲に、金融会社や語学スクールなどの大仰な広告物を掲げた中・高層の雑居ビルがぼつぼつ建ち並ぶといったありさまである。

わざわざ北信地域の玄関口と銘打って、結局、この程度の都市景観が立ち上がるだけなら、かえって飯山の品位と魅力を損なうことになりかねない。それを回避するな

ら飯山は「別の道」を選択するほかない。「別の道」で駅周辺に大きな商業床を獲得することが本当に必要なのか。むしろ、小規模にして質の高い商業活動を展開することが求められるのではないか。飯山周辺の経済力と、既往の家並みの規模との整合性に留意し、飯山全体が北信州地域の「玄関」たる「もてなしの環境」を整備する、そういった展望のもと、駅周辺空間がその布石となることが重要ではないか（第2章2-2参照）。

2) 道路空間の留意点・課題

(1) 都市計画道路

ここでは、都市計画道路である綱切線・駅前線・斑尾線（図表 序.2 参照）について述べる。

(a) 綱切線

新幹線飯山駅を起点として、寺町方面に至る交通路である。その意味では、歩行にしろ、自動車にしろ観光客の通行ルートとして重要である。ただし、野沢温泉方面など、より広域に向けた二次交通の主要交通路としては、中央通り線がその役割を担うとも考えられる。

ところで、駅前空間は、駐車場、タクシーベイ、バスベイに占拠されたような交通広場から脱却すべきだとする新幹線まちづくり市民会議などの要望がある。これを反映するには、あらゆる交通をできるかぎり駅前広場に押し込めるという常套的レイアウトにこだわらないことも必要である。この場合、交通ターミナル機能を駅前広場から綱切線まで拡張して計画することも考えられる（第4章参照）。

(b) 駅前線

飯山赤十字病院前を東西に通る南校線を延長し、中央通り線と新幹線飯山駅とを連絡する道路である。この周辺は、もともと戸建て住宅で占められているため、区画整理後も当面は住宅地に落ち着く可能性が高い。また、飯山市街を東西に結ぶ道路がこれ以外に数多くある中で、千曲川左岸の国道線とも接続しないこの道路が、交通ネットワーク上、重要な位置を占めるとは考えづらい。

したがって、歩行者の通行に力点をおき、駅前広場から続く上品で静かな街路としてここをまとめるということも考慮に値する。飯山市街を東西に結ぶ道路は、市街から千曲川右岸の山並みへの視界を提供する可能性が高いということとあわせて、沿道の建築のありようとともに検討されるべきであろう（第4章参照）。

(c) 斑尾線とこれに関連する道路

在来線の飯山駅駅舎を廃して、上南線を西に延長して斑尾線とするものである。この道路は、上南線を介して中央通り線や国道線と接続する一方、片山神社の南に沿って長峰丘陵を抜け、飯山西まわり線や主要地方道飯山斑尾新井線とも接続するため、

それ相応の通過交通が見込まれる。したがって、交通量によっては、飯山旧市街と新幹線飯山駅周辺とを心理的に分断しかねない危険性をはらんでいる。新幹線飯山駅が、現在の飯山駅によりも寺町などの旧市街からさらに遠い位置に設けられることとあわせて、特に歩行者を駅から旧市街へと誘導する際の障害になりかねない。

在来線飯山駅跡地周辺の環境整備、じょんのび夢蔵のこの近傍への移転活用（第4章および第6章参照）、防火帯として設けられた水路と桜並木付きの真宗寺線の環境整備などを連携させ、寺町方面に至る綱切線の立ち寄り拠点を確保することと、綱切線、斑尾線自体の歩行環境を充実させることが課題となるだろう。ただし、これには民有空間との連携も必要である（第5章参照）。

また、斑尾線については片山神社の南に沿って長峰丘陵を抜ける際に、丘陵の一部を掘削する可能性がある。このときの法面処理はこの美しい丘陵に著しい影響を与える恐れがあるため、どのような土工が適切か、道路位置の詳細な決定に際して入念な検討が必要である。

（2）山岳眺望と幹線道路

山岳眺望という観点から道路をみると、とくに飯山市街地内では東西方向に抜ける道路が重要である。区画整理区域の範囲内では、駅前線がそれに該当する。

駅前線では高標山が眺望対象になる。ただしこの道路軸に対して、高標山の尖峰はやや南にシフトした方向に見えるため、道路断面構成や沿道建築の影響を吟味する必要がある。すなわち高標山眺望を駅前線から好適に保つためには、街路樹の位置や歩道幅員など、北側歩道の歩行環境創出と、道路南側敷地の建築の壁面線位置や建築高さ（ひいては用途地域指定のありよう）が関与してくることを念頭におくべきだろう。あわせて、沿道建築の屋上工作物まで含めた眺望管理が必要となろう（第4章4-2参照）。

（3）区画街路

区画街路は、住民生活と直結するところでもあり、関連する住民とともに協議しながら決定することが望ましい。しかし、ともすれば、目先の利益優先へと短絡する恐れもあり、その限りでは良好な住環境を創出できるかどうかは疑わしい。そこで、まず、区画街路の典型的な成功例について、その決定プロセスを含めた事例研究、現地見学会や勉強会を実施して、住民とともに批評眼を養うことが必要だと考えられる（第7章参照）。

3）公共施設の整備（配置）について

（1）駅前広場について

（a）公園のような駅前広場を

新幹線飯山駅駅前広場は、交通ターミナル機能に特化させず、むしろ「公園のよう

な」環境整備が望ましいと、新幹線まちづくり市民会議が提起している。この「公園のような」という意味は、単に緑量の多さを求めているというよりも、人々が通過するだけではなく、そこにくつろぎ、場合によってはイベントを開催して来街者と地元の人々がともに楽しむような余地を確保してほしいということだと思われる。この駅前広場が飯山の美しい山並みとその場所ならではの関係を保つということによっても、「公園のような」という趣旨が反映されるだろう。

たっぷりとした歩行者空間、滞留スペースを確保するためには、ターミナル機能の一部を綱切線に付加することも含めて柔軟に検討することが肝要である。また、駅前広場に歩行者の滞留スペースを単独で確保したところで、実際の滞留は起こらないことも多い。この観点から広場に面する建築物（駅舎や商業施設）との有機的な関係を考慮する必要があるだろう。寺町などの魅力に富む旧市街地は駅前広場からみて北方にあるため、その方向への歩行者の誘導と、駅前広場内の空間レイアウトとの関連性についても考慮する必要がある（第4章4－1参照）。

(b) 雪処理

有数の豪雪地である飯山市では、駅前広場での積雪を全面的に融解させることはコスト面からむずかしく、少なくとも最低限の歩行者スペースや、車両スペースで融雪させ、それ以外は堆雪帯を確保し、そこに当面、雪を集めることになるだろう。その雪をおもしろく眺められるように駅舎や駅前広場を設計することも肝要である。

(c) 観光関連施設の導入について（駅舎も含めて）

信州菜の花地域ウェルカムプランでは、「悠久」、「不易」をキーワードとした北信州地域観光政策の展開にとって飯山駅駅舎・駅前広場計画を重要なステップと見ている。

観光情報の提供拠点としても駅舎もしくは駅前広場は重要である。多様な情報サービスを提供できる体制を整えるとともに、駅前広場などの維持管理やイベント運営にかかわるパークマスター制度などとも連携させた柔軟なシステムを構築することも肝要である。その場所を駅舎内に設けるか、合築によって確保するか、駅前広場内に設置するか、利用者の視点に立った検討が必要である（第3章・付属資料参照）。

(d) 飯山独特の二次交通について

飯山は周辺の温泉地への交通拠点であるため、新幹線飯山駅駅前広場でも各地からの送迎車が新幹線到着時刻に一時的に集中する可能性がある。これらの車両の待機・乗降スペースとタクシー、バス、地元の通勤車両のスペースのレイアウトが大きな調整案件となるだろう。利便性だけを考えて個別に必要とされる車両関係スペースをすべて駅前広場に押し込めば、それこそ「公園のような」という趣旨の実現は遠ざかり、いわゆるありがちな交通ターミナル空間に帰結してしまう。誰がどの程度の「不便さ」を受容するかが鍵となるだろう（付属資料参照）。

(2) 駅舎ならびに駅前広場を通した山岳眺望について

(a) 駅舎

駅舎のプラットフォームは、そのすぐ西側に位置する長峰丘陵（相対地上高約 30m）には及ばぬまでもそれに匹敵するような高さであるから、飯山市街や山岳眺望に資する。

プラットフォーム、コンコースなど、来訪者が飯山駅前に降り立つ前に、あるいは飯山を離れる直前に、少し高い位置から飯山の山河を眺望するという経験は印象に残るだろう。眺望を活かした駅舎の設計がすすめられることが望ましい。

(b) 駅前広場とオープンスペース

駅舎予定地にあつては、現在、北に黒岩山・仏ヶ峰が、西に長峰丘陵が、東に毛無山・城蔵山・高標山・高社山が眺められる。駅舎ならびに新幹線の連続高架橋の出現によって、このうち、高標山と高社山とが眺望上、分離される。すなわち、駅前広場（北側）からは仏ヶ峰～高標山への眺望、駅前広場（南側）からは高社山が眺望される。

しかしながら、この眺望も、駅前広場周辺の建築状況に大きく依存する。駅前広場に近接する場所に街区公園などのオープンスペースを確保することで、眺望保全の実現可能性が高まるだろう。

(3) 日影の問題

駅舎ならびに新幹線の連続高架橋によって生じる北側の日影は、冬季にかなり広範に及ぶ。このような場所では、雪が春遅くまで融けずに残る可能性もある。したがって、場所によっては住宅を割り付けることは妥当ではないと考えられる。オープンスペースをあてる場合には融雪装置が必要になる場合もあろう。

4) 民有空間の誘導

まちづくりは、特定の作者の手になる鑑賞の対象としての「作品」ではない。住まい手がいて、その人々の現実的な生活によってはじめて意味をもつダイナミックな「行為」である。ある時点でまちがかたちを見せたとしても、それは決して完成形ということではあり得ない。住まい手によって維持され、改良され、更新されていくことこそがまちの本質である。

その上で、このまちが全市公園化構想、飯山市景観形成基本計画、新幹線まちづくり市民会議報告、ウェルカムプランの提起する飯山の将来像と響きあうものとなれば、そのまちの魅力はいや増すことになるだろう。

その意味で、北陸新幹線飯山駅周辺都市デザイン会議が、当該地に実際に住まう人々と情報交換を密にし、あるいは議論を戦わせながら、信頼関係を築き、まちづくり意識を互いに共有する努力を続けなければならない。そのための適切な手法や手続きの検討（第7章参照）は、当地の将来像をどのように描くかという検討と同じ程度に重要であ

る。

その際に案件になりそうな項目の主なものを以下に2, 3紹介する。

(1) 駅前広場に面する建築のあり方について

飯山駅を狭い意味での玄関口だと考えるのではなく、飯山市全体を北信州地域の玄関口であり、もてなしの場と考える枠組もありうることにについては、先に言及した。しかしながら、物理的には、新幹線利用客は新しい飯山駅からこの地に降り立つ。その第一印象がきわめて重要だということは言うまでもない。

一方において、駅前広場を、他の新幹線駅前のような、自動車を捌くだけで精一杯の、余裕なき空間にはしたくないという人々の思いがある。「公園のような」駅前広場がうまく実現すれば、飯山の第一印象を良い意味で特徴づけることができよう。しかし、それは駅前広場内での工夫のみでは不可能である。その意味で、駅前広場に隣接する民有空間や市有地のありかたについて検討を要する（第5章参照）。

(2) 山岳眺望と駅前広場周辺の建築との関係について

先述したように「公園のような」駅前広場とは、単に植栽密度の高さを意味しているのではない。この地を訪れる人々が賞賛し、地元の人々にとっても精神的な拠り所となっている飯山の山河が、あたかも借景のように駅前広場から経験されるようなら、これもまた、飯山の第一印象を特徴づけるだろう。こうした「まちなか」の山岳眺望と、駅のプラットフォームやコンコースにおける山並み眺望がともに実現するなら、飯山というまちが、山河の眺めに愛着と誇りをもっているという姿勢表明にもなる。全市公園化構想は、このような方法によっても具体化していく。

駅前広場(北口)から北方向には黒岩山・仏ヶ峰が見える。駅前広場(北口)から北東方向には、毛無山と城蔵山が見える。駅前広場(南口)から南東方向には高社山が見える。高社山を見て人生の啓示を得たという飯山高等女学校校歌にみられる精神性を思えば、まちなかにおける高社山との第一印象はとくに大事にしたい。民有空間に限らず、駅前広場周辺の建築がこうした山岳眺望に与える影響をシミュレーションで把握し、眺望保全のあり方について検討を重ねる必要がある。

(3) 沿道建築と連携した街路空間の創出について

民有空間と道路敷との境界ぎりぎりまで建築壁面が迫るような場合、街路の歩道幅員に余裕がないと歩行者に圧迫された印象を与えやすい。逆に、沿道が広大な駐車場など低未利用地になっていると茫漠とした印象を与えやすい。このように街路空間は沿道空間の用途、建築規模、壁面の位置などに影響をうけるため、民有空間と連携してそのあり方を検討する必要がある（第5章参照）。

1－3 都市空間デザインの要所

1－3では、都市空間形成の軸線となる幹線道路等の位置づけを明らかにするとともに、1－2の指摘等を踏まえて重要視点および眺望軸を再整理する。

1) 幹線道路の位置づけ

対象地区の具体的な土地利用や空間配置、駅前広場等の公共施設のレイアウト等は、新幹線飯山駅および人々の利用動線を構成する幹線道路や歩行者ルートが主軸となっていくべきことは言うまでもない。そこでここでは、本地区を構成する主要道路等の位置づけと整備方針を再整理する。

①網切線：もてなしゲートウェイ

- ・駅前広場と一体的に交通結節機能を持たせながら、地域住民にとっても域外からの来訪者にとっても共通のゲートウェイとして位置づけた整備を図る。

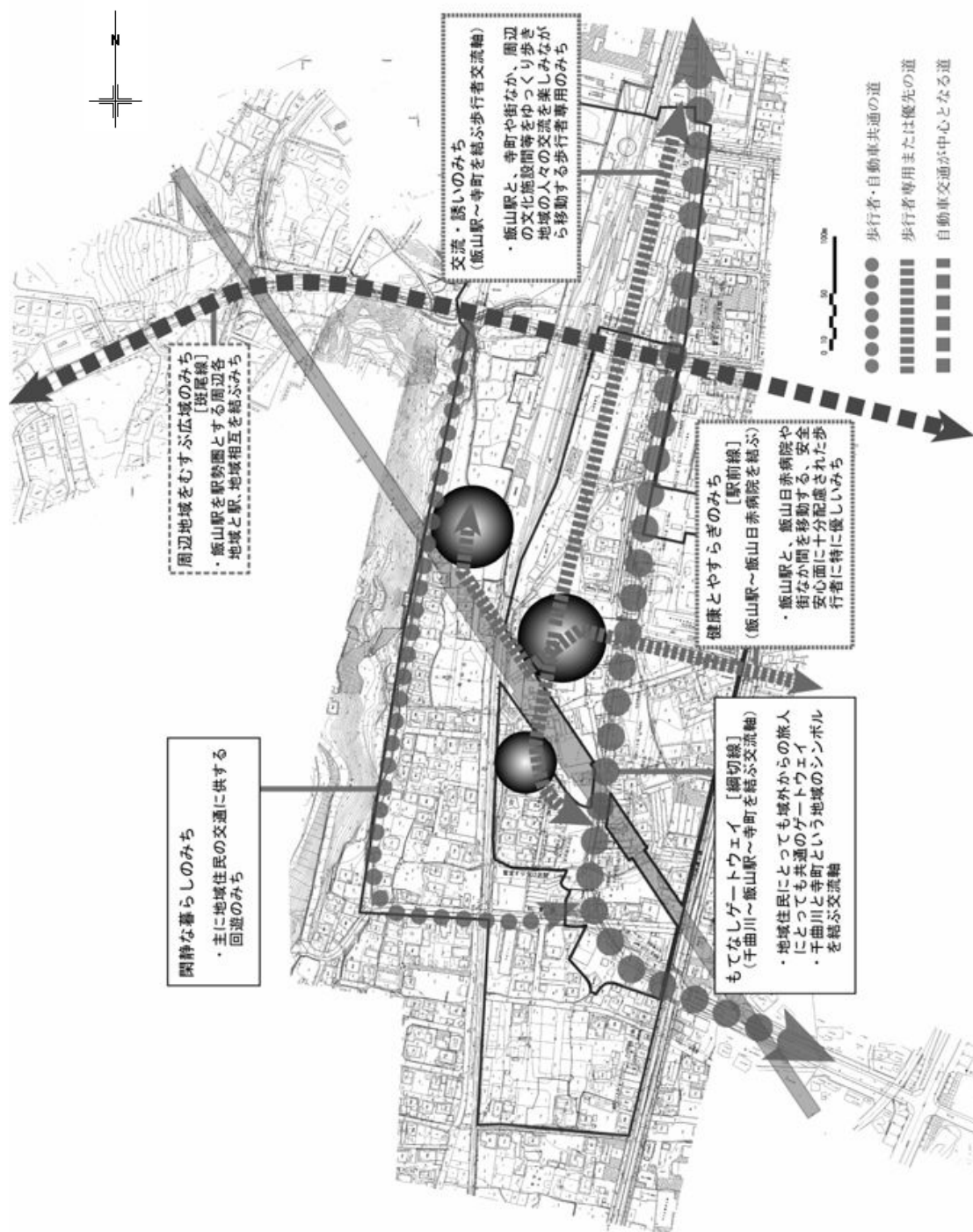
②駅前線：健康とやすらぎのみち

- ・歩行者の通行に力点をおき、駅前広場から続く上品で静かな街路をなしていく。

③斑尾線：周辺地域を結ぶ広域のみち

- ・飯山駅を駅勢圏とする周辺各地域と駅、地域相互を結ぶ広域観光・交流の道路として相応しい整備を図る。

■図表 1.2 幹線道路および歩行者ルート等の位置づけ



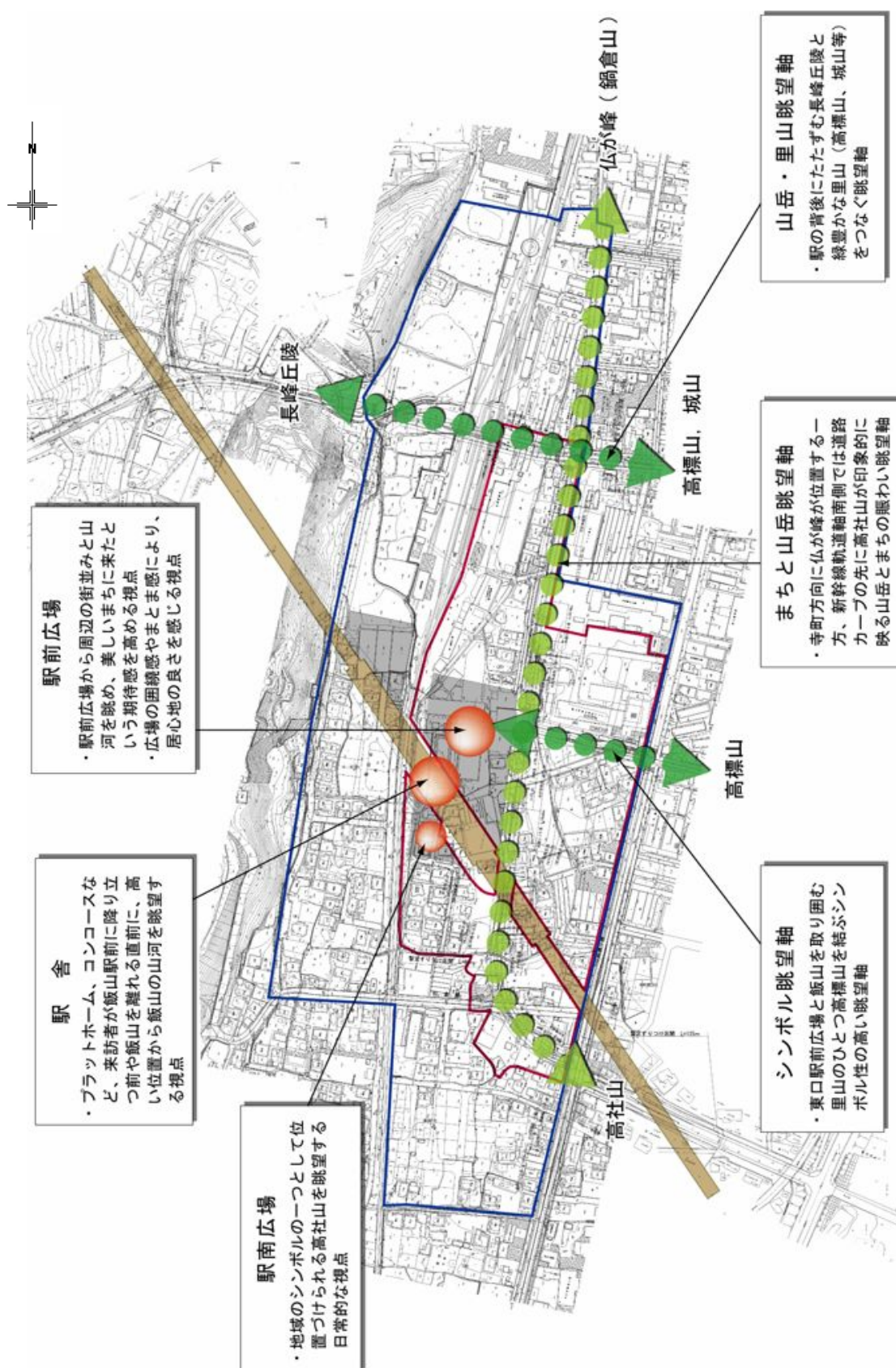
2) 重要視点および眺望軸

対象地区の諸特性および、前述したような「風雅のまち」を実現する都市空間デザイン基本方針を踏まえ、本地区の具体的な都市空間デザインを検討するに当たっての重要視点や、周辺の街並みと山河を一体的に通景することができる眺望軸を抽出すると、図表 1.3～1.4 のようになる。

■図表 1.3 重要視点および眺望軸とその基本方針

区分	重要視点 眺望軸	基本方針	備考・課題
重要視点	駅舎	・プラットホーム、コンコースなど、来訪者が飯山駅前に降り立つ前に、あるいは飯山を離れる直前に、高い位置から飯山の山河を眺望するという経験を与える視点	眺望を活かした駅舎の設計が必要。
	駅前広場	・駅前広場から周辺の街並みと山河（高標山、城蔵山、毛無山、仏ヶ峰、鍋倉山等）を眺め、美しいまちに来たという期待感を高める視点 ・併せて広場としての適切な囲繞感やまとまり感の創出により、居心地の良さを感じさせる視点	地方中心都市の新幹線駅に出現しがちな、雑居ビルと大きくて派手な広告が創り出す視覚的な喧噪の排除
	駅南広場	・地域のシンボルのひとつとして位置づけられる高社山を眺望する日常的な視点	駅南広場周辺の建築物の配置、高さ等との関係に配慮
眺望軸	駅前線	・飯山駅に向かう方向（西方向）は新幹線飯山駅駅前広場がアイストップに位置する一方、東方向は飯山を取り囲む里山のひとつ高標山が配置される「シンボル眺望軸」。街なかにおける山岳眺望の確保などを基本方針とする。	山岳眺望を好適に保つためには、街路樹の位置や歩道幅員等の歩行環境創出と、沿道の建築物の壁面線位置や高さに配慮が必要
	綱切線	・寺町方向に仏ヶ峰（鍋倉山）が位置する一方、新幹線軌道敷南側では道路カーブの先に高社山が印象的に眺められて（千曲川綱切橋に至る）「まちと山河眺望軸」	
	斑尾線	・西方向は長峰丘陵が位置する。東方向は高標山、城山等が配置される「山岳・里山眺望軸」。視軸方向の緑豊かな里山や丘陵の眺めの保全を基本方針とする。	新幹線駅周辺地区と、旧市街地との連続性に配慮 長峰丘陵通過部の土工の景観的影響をできるだけ軽減

■図表 1.4 重要視点および眺望軸とその位置



3) 鉄道施設に関する都市空間デザイン上の要所と課題

都市空間デザイン方針において前述したように、交通結節点として乗降客や市民が日常的に集う新幹線飯山駅および本地区を縦貫する高架軌道等は、市民の静謐な暮らしが展開される本地区において、利用面、景観・環境両面で大きなインパクトをもたらすもので、十分な配慮が求められる。

こうした鉄道施設に関する都市空間デザイン上の要所と課題を再整理してみると、図表 1.5 のようになる。

■図表 1.5 鉄道施設に関する都市空間デザイン上の要所と課題

